



新聞の父

ジョセフ・ヒコ

ジョセフ・ヒコ(浜田彦蔵)は、天保8年(1837)に播磨町古宮に生まれました。13歳のとき、初めて乗った船が嵐で難破し、52日間太平洋を漂流した後、アメリカ商船に救助されました。渡米後、カトリックの洗礼を受けてジョセフ・ヒコと名を改め、米国市民権を取得したヒコは、3人の大統領と会見するなど見聞を広め、民主主義に共鳴しま

す。望郷の念と開国して激動する故国への熱い思いに突き動かされて帰国したヒコは、日本人に欧米のニュースや民主主義の思想を伝えるという理想のもと、日本初の民間新聞を発行します。「子どもにも読める」という編集方針、定期発行、広告掲載などのビジネスモデルは、今日の新聞の基礎を築いたとして高く評価されています。



ジョセフ・ヒコによる両親と家族の墓

- 1837 ○ 播磨町古宮に生まれる(幼名:彦太郎)
- 1850 ○ 江戸への帰りに太平洋を漂流し、米国船に救助される
- 1851 ○ サンフランシスコに着く
- 1852 ○ 帰国を試み香港まで戻ったが、再びアメリカへ
- 1853 ○ 税関長で優れた企業家だったサンダースの秘書として働く
○ 日本人初 ピアース大統領と会見
- 1854 ○ 洗礼を受け、ジョセフ・ヒコに改名
- 1857 ○ ブキャナン大統領と会見
- 1858 ○ 日本人初 アメリカ市民権を取得
- 1859 ○ 帰国し、アメリカ領事館通訳として働く
- 1860 ○ 領事館を辞任し、貿易商館をひらく
- 1861 ○ 外国人が襲撃・暗殺される事件がたびたび起こり、身に危険を感じ再び渡米
- 1862 ○ リンカーン大統領と会見
○ 帰国後、再び領事館通訳として働く
- 1863 ○ 商社を設立し、新聞発行の準備を始める
- 1864 ○ 日本初の新聞を発行
- 1868 ○ 長崎へ移り、英国商館と鍋島家との間を斡旋し、高島炭坑の共同経営を成立させる
○ 故郷古宮へ戻る
- 1869 ○ 大阪造幣局の設立に尽力
- 1871 ○ 「横文字の墓」とも呼ばれる、両親の墓碑を除幕
- 1875 ○ 北風氏と合同で、神戸で製茶の輸出貿易を始める
- 1876 ○ 北風氏との茶商を解散し、単独事業となる
- 1881 ○ 神戸で精米所を始める
- 1884 ○ 精米所の蒸気機関を貸し、神戸に初めて電燈が灯る
- 1897 ○ 心臓病で死去し、青山外人墓地に葬られる



ヒコと友人ヴァン・リード



西洋型帆船の父

本庄善次郎 (ほんしょうぜんじろう) やまぐち
山口洋右衛門 (やまぐちようえもん) はまもと
浜本帰平 (はまもときへい) きむら
木村甚八 (きむらじんぱち)

本庄善次郎、山口洋右衛門、浜本帰平、木村甚八はジョセフ・ヒコの漂流仲間。帰郷後、姫路藩主から西洋風の大帆船の建造を命じられ、安政5年(1858)、約3年の歳月をかけて西洋型帆船第1号「速鳥丸」を完成させました。



イラストレイテッド・ニュース

速鳥丸(上)・神護丸之図

郷土に尽くした苦勞人庄屋

梅谷七右衛門清政

梅谷七右衛門清政は天和3年(1683)、東本庄村の庄屋の家に生まれました。満16歳の若さで庄屋を継いだ清政は、貧しかった村を救うため、新田開発に着手し、村の人々を救いました。その後、魚問屋を開業して経済的に成功をおさめました。私生活はきわめて質素で、地域の寺社の再建や困窮者の援助などに私財を惜しみなく投じました。

ぐきょうき 『愚胸記』
とうけりっしんのまき
『當家立身巻』

苦勞人庄屋だった清政が書き遺した記録で、当時の村の様子や清政の人間像を伝える貴重な歴史資料です。



近代美術の旗手

浅原清隆



淡路島



女子アパート

30歳という若さで早世した浅原清隆は大正4年(1915)、現在の播磨町南大中に生まれました。帝国美術学校(現在の武蔵野美術大学)在学中、第22回二科展に作品が入選し、新しい絵画運動に身を投じました。

令和3年、ゆかりの3件を播磨町指定文化財に指定



ぎょかいりくようとう 魚介類供養塔

魚問屋を開業して財を成した清政が、扱ってきた魚介類に感謝を込めて建立した高さ325cmの堂々とした宝篋(ほうきょう)印塔です。



さんがいばんれいじぞうそん 三界萬靈地藏尊

寛保3年(1743)、清政が亡き妻の追善供養のために無量壽院境内に建立した大きな石仏です。

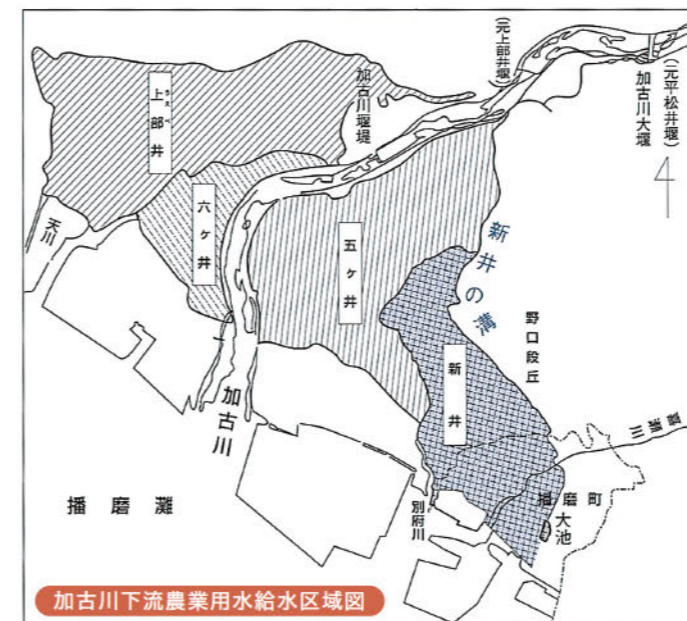
新井開削の父

承応3年の大干ばつ
春から秋にかけて雨が降らず田畑は地割れし、作物はおろか種籾さえも収穫できない惨状でした。この大干ばつを機に傳兵衛は長年の悲願だった新井開削を決意しました。



現在の新井用水(大中)

今里傳兵衛

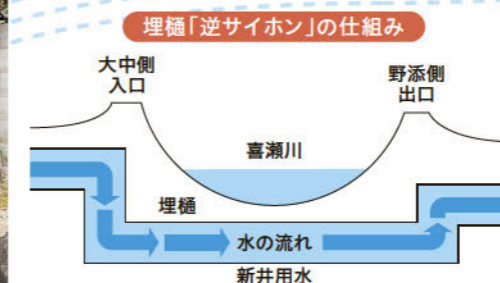


加古川下流農業用水給水区域図

江戸時代初期の承応3年(1665)、播磨地方は大干ばつに見舞われました。古宮組(現在の播磨町及び加古川市)の大庄屋、今里傳兵衛は、水不足で苦しむ農民たちを目の当たりにして、用水路(新井)の開削を決意しました。足が棒になるほど現地調査を繰り返し、水路の絵図面を完成させた傳兵衛の熱意は地域の庄屋たちを動かし、皆が工事の陳情書に署名をしました。姫路藩主の榊原忠次は、陳情の席で「工事をしたのに水が流れなければ家族全員が極刑になっても構いません」という身命を賭した傳兵衛の言葉に感銘を受け、工事の早期着工を許しました。日岡山山麓の岩盤削りや喜瀬川への埋樋埋設など難工事の連続でしたが、傳兵衛の綿密な計画があったおかげで、着工からわずか1年で新井は開通しました。



傳兵衛の墓
古宮薬師堂の墓地にあり、先妻、後妻と合祀されています。



喜瀬川の埋樋
水を通すために川底に埋められた松材の樋(とい)で、現在はコンクリート造りに改修されています。



大池
石灯笼、玉垣門、今里傳兵衛翁頌徳碑、新井改修記念碑、播州加古郡新井記略石碑などが、新井用水ゆかりの大池の地に建てられています。

国指定史跡

大中遺跡

印南野台地の南端に広がる大中遺跡は、昭和37年(1962)、町内の3人の中学生によって発見されました。遺跡の総面積は約7万㎡に及び、発掘調査では弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての竪穴住居跡や土器や鉄器、砥石が多数出土し、中国との交流を示す青銅製の「内行花文鏡」の一部も発見されました。昭和42年(1967)にはこの時代を代表する遺跡としての史跡に指定されました。出土品は郷土資料館と県立考古博物館に展示・保存されています。



古代の暮らしを360° ARで再現!



内行花文鏡片



弥生時代の土器



鳥形土製品



イダコ壺

大中遺跡公園

大中遺跡の竪穴住居などを復元した遺跡公園で、隣接地に兵庫県立考古博物館と播磨町郷土資料館があり、町内・町外の小学校を中心に歴史学習の場として活用されています。



むりょうじゆいん
無量壽院の
りしゆきよう
版木「理趣経」等

寺の沿革を記した本尊巻起1枚と理趣経4枚の版木で、文明19年(1487)の制作と推定されています。



おつきみ
御月見日記

享保5年(1720)から約180年間、旧野添村川端の農民が当時の暮らしや社会情勢をつづった記録です。



ぜんぶくじ ほうきよういんとう
善福寺の宝篋印塔

総高157cmの方形一重の塔形です。笠の四隅からほぼ垂直に突き出た飾りの特徴から室町時代初期の建立と推定されています。



あえ
阿閑神社本殿

本殿は江戸時代中期の建立で、檜皮葺の一間社春日造の社殿が西向きに4棟連なり、それぞれに神様が祀られています。



播磨小学校の
クスノキ

明治33年(1900)、同校が現在地に移転した記念に植樹された8本のクスノキのうち記念樹として残された1本です。



こみや
古宮の獅子舞

寛永11年(1634)、古宮住吉神社隣の榎木大明神で舞われた古宮講の伊勢太神楽を起源とし、古宮住吉神社の秋祭りに奉納されます。

こみや
古宮薬師堂の
木造薬師如来座像

「お薬師さん」と親しまれる木造寄木造の仏像です。衣のひだの表現が美しく、平安時代末期の作といわれています。



あたごづか
愛宕塚古墳

古墳時代中期に築造された直径約22m、高さ2.2mの円墳で周囲は壕が巡らされ、地域の有力者の墓と推定されています。近世に祠がつくれ「愛宕さん(愛宕権現)」と呼ばれ慕われています。



二子住吉神社の
クスノキ

長享3年(1489)創建の二子住吉神社の拝殿横にそびえる樹齢約500年の御神木で、播磨町最古の樹木です。

梅谷家住宅

代々、庄屋を務めた梅谷家の10代目が昭和13年(1938)に建てた住宅で、主屋・離れ・北塀・西塀は国登録有形文化財です。また、同住宅は県の景観形成重要建造物にも指定されています。

れんげじ らいはん
蓮花寺「礼盤」

礼盤は本尊前に置かれる台座で、内側には姫路藩主・池田輝政の妻、督姫が父・家康に会いに行く大行列の様子などが墨書されています。



えんまんじ
圓滿寺の
釈迦十六善神画像

応永2年(1395)の作で、中央の釈迦如来坐像、両側の文殊菩薩と維摩居士(ゆいまこじ)を十六善神が取り囲んでいます。

